シリーズ 探訪・探求

訪れたいまち

第三十六回

宮城県女川（おながわ）町

ゆぽっぽ・JR女川駅から海まで続くプロムナードの真正面、女川の海に昇る平成28年の初日の出（写真提供：吉田雅氏）

つなげる思い

東北新幹線仙台駅から在来線に乗り換え2時間余り。JR石巻線の終着駅「女川」。駅舎を出ると目の前には広く真新しいプロムナードが真っすぐ女川湾へ延びる。潮風が心地よい。

宮城県牡鹿（おしか）半島の基部に位置する港町・女川にも平成23年のあの日、巨大津波が押し寄せた。もともと町の84%が山林である女川町の人々は、湾岸のわずかな平地や山間地に肩を寄せ合うように暮らしていたが、津波はここにも容赦なく駆け上がった。死者・行方不明者827名（人口の8・26%）、建物全壊率66%、被災率85%と甚大な被害を受けた。巨大津波は女川町の人々の何もかもを奪い去った。

「復幸（ふっこう）」の願い

被災から2カ月。何もない女川に「復幸市」が立った。現在、復幸まちづくり女川合同会社代表を務める阿部さんは語る。「全国の皆さまからたくさんの支援をいただいた。とてもありがたかった。でも、いただいているだけだった。だから、少しでもいいから、自分たちで売る、買うという日常を再スタートさせたかった。〝復幸〟とは文字通り、幸が復すること。これから道路や工場、住宅を復興させなければいけないけれど、それだけではダメ。ここに生きる人々の気持ちが再び〝幸せだなあ〟と感じられてこそ〝フッコウ〟と言える。そんな願いを込めました」

年に一度の「復幸祭」の様子。福男で有名な兵庫県西宮神社で毎年開始の合図「開門」と叫ぶ平尾さんと福男が町を訪れてくれる。平尾さんの「逃げろ」の叫びを合図に参加者が一斉に高台へと走る。（写真提供：女川町）

被災した女川町役場。津波は3階部を呑み込み屋上にも迫った。当時在所した方や近所の方たちは、屋上のさらに上、塔屋部に避難し何とか難を逃れたという。（写真提供：女川町）

みんなで考える未来

どのような町に復興、再生していくのか…。町民みんなで未来を考えた。まちづくりワーキンググループには、商工業や水産関係で働く者、各団体の有志、そして若者や高齢者など女川町に関わる人たちが参集し議論を重ねた。他の先進的まちづくりを実践している町にも、阪神・淡路大震災からの復興を経験した町にも話を聞いた。

女川は海なしでは考えられない。海あっての女川である。水産業がこの町の基幹産業であることに変わりはない。海と共に生きる。みんなが同じ方向を向き動き出した。

感謝の気持ちをまちづくりに

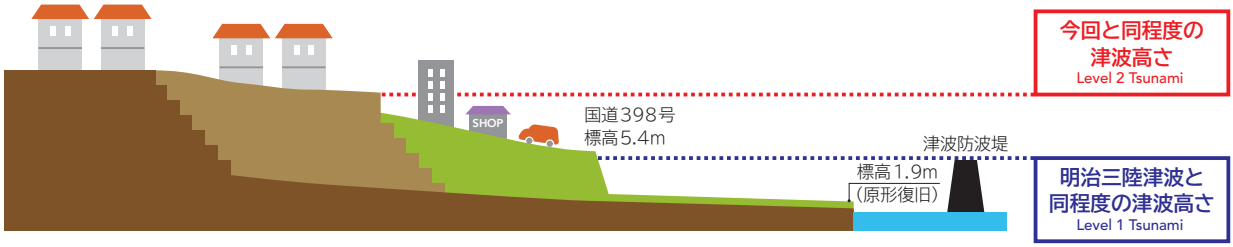
女川町観光協会事務局長の遠藤さんが語ってくれた。「今まで支援の手を差し伸べてくださった全国の皆さまへの感謝の気持ちと町のPRを兼ね、女川の水産加工品などの紹介と販売を全国で行ってきましたが、これからは観光協会自体が旅行業に乗り出し、水産業体験ツアー、ダイビング、湾内遊覧などを企画提供していきたい。女川の資源を活用した教育ツアーにも力を入れていきたい。女川を応援してくれた方々に『女川に関わってきて良かった』と思っていただけるような、そんな町にしていく。これが皆さんへの恩返しです。そして、この町を子どもたちへつないでいきたい」

湾岸部は水産業を営む魚市場・水産加工場が立地するエリアとし、海と水産業をつなげる。一段高く盛土（L1津波クラスまでの防潮堤としての機能も兼ねる）して整備するエリアには国道、駅、商店、銀行、病院、事務所などを集中立地させ、人々の生活活動などのエリアとし、にぎわいの創出と人々をつなげる。居住地は山を切り盛りするなどさらなる高地を整備し（L2津波に対応）、安心して居住できるエリアを確保し命を守る。魚市場・水産加工場エリアと商業業務エリアは災害危険区域。東日本大震災クラスの津波には対応できないが、そのときは高台へ「逃げる」。（左資料提供：女川町）

写真上は住宅地高台造成の様子。下は女川町地方卸売市場建設の様子。

町中心部の復興市街地整備の方針（土地利用計画）

		災害危険区域 Disaster Hazard Area (residence is restricted)	
居住地	居住地	商業業務エリア	魚市場・水産加工場
Residential Area (developed hill)	Residential Area (elevated ground)	Business and Commercial Area	Fishing Port, Seafood Factory



ゆぽっぽ・JR女川駅

女川町の玄関口。女川町復興の象徴となってきた。世界的建築家の坂茂さんの設計。海に向かって飛び立つ女川町の鳥「ウミネコ」をイメージした屋根が印象的。館内には、日本画家千住博さんの絵と公募で集まった900点余りの花の絵を合わせた巨大なタイルアート「家族樹」なども見ることができる。

この町で働きたい

JR女川駅舎には「ゆぽっぽ」がある。天然温泉で観光客や地元の方たちの憩いの場だ。支配人の吉田さんは昨年3月にそれまでの職を辞して女川町へやって来た。「震災後、各地の被災地へボランティアとして入ったが、次第に被災地で自分の経験を生かした仕事に就きたいと思うようになった。女川町の方々とは垣根なく付き合える。この町に関わって生きていけることは、自分のこれまでの人生で一番価値あることだと実感しています。子どももお父さんらしいと応援してくれていますよ」

具体的な形を次世代へつなぐ

昨年12月23日、ゆぽっぽ・JR女川駅前から女川湾へと通じる一帯に商業エリア「シーパルピア女川」がオープンした。このシーパルピア女川は、女川みらい創造株式会社により運営されている。専務の近江さんが教えてくれた。「震災により全てを失った女川が再生し、また人口減少、少子高齢化の時代にあっても持続可能な町として生き残るには、役所だけ、民間だけで考えていてもダメ。全ての関係者の知恵を結集しなければ。この会社は公民連携によるまちづくり会社です。地域貢献、活性化を自分の生き様にして10年目、あらためてこの場所での活動にしっかりと取り組んでいく覚悟です。女川が持つ海、空、自然、景観といった人間にはつくれないものを軸に、人間が創造できるものを添えて、次世代の方たちに新しい、持続可能なまちづくりの仕組みを具体的な形でつなげていくことが今の目標であり、夢です」

女川ブランドを全国へつなぐ

女川ブランドも育ちつつある。女川町で水揚げされた原材料を使用、あるいは女川町内で製造された商品を条件に、味はもちろん、パッケージ、価格のバランスを県内外の食のスペシャリストが審査。基準に合格した商品が「あがいんおながわ」のブランド名を冠して販売されている。この事業を手がける復幸まちづくり女川合同会社の阿部さんが語る。「震災前の女川は、現状維持だけでは、いずれ衰退する町だったと思います。震災は確かに不幸な出来事でしたが、みんなで立ち上がらざるを得ない状況を生み出した。この会社もまだ動き出したばかりですが、運営方法などをさらに工夫して事業が自走できるようにするのが今の目標です。〝稼ぐまちづくり〟です。全国の皆さまにはぜひ、女川に遊びに来てくださいと言いたいです。実際に見てください。体験してください。文字や写真だけでは伝えきれない、さまざまな何かが女川にはあります。遊びながら学べる町です。もしかしたら、あなたの価値観さえ変えてしまうかも。女川の人たちとぜひ話をしてみてください」

夜のシーパルピア女川とゆぽっぽ・JR女川駅

女川町まちなか交流館

プロムナード沿いにある町民や来町者が気軽に立ち寄れる“まちなか”の交流拠点。ホール、会議室、音楽スタジオ、調理室、キッズコーナーなどで構成されている。
（写真提供：女川町）

女川水産業体験館「あがいんステーション」

旧JR女川駅の外観を復元。「あがいん おながわ」のブランド名（商品に金色のシールを貼り付け）のもと、女川の水産加工品を販売。ネット販売なども手がける。その他、水産加工体験などいろいろなコンテンツも用意されている。「あがいん おながわ」とは英語の「again（再び）」と女川方言「あがいん（召し上がれ）」を掛け合わせ、「再び笑顔あふれる街にすること」「女川の美味しい物を食べて欲しい」という思いが込められている。

あの悲しみは忘れない

この取材中、一番不思議に思ったことは、お話を伺う全ての方が異口同音に〝つなげる〟という言葉を語ること。そして、女川町出身者もそうでない方も、みんなが同じ方向を向いて懸命に行動していると感じられること。女川町役場産業振興課の土井さんに尋ねてみた。

「私たちは、あの悲しみを忘れることはできないし、決して忘れない。全てを失ったからこそ、人と人とのつながりや力を合わせることの大切さを誰もが共有しているのではないでしょうか」

＊＊＊

女川町の本格的フッコウは、まだまだこれからであるのが現実。しかし、この町には何かを感じる。ここに生きる人々の底知れぬパワーなのか、人がもともと持つ優しさなのか。

昨日は終着駅だった女川駅。今日は始発駅。鉄路はここから全国へつながっている。

顔写真（右上から時計回り）復幸まちづくり女川合同会社：阿部さん、女川町観光協会：遠藤さん、ゆぽっぽ：吉田さん、女川みらい創造株式会社：近江さん、女川町役場：土井さん

上文：地元小学生の詩の一節。女川町地域医療センターの建つ高台に横断幕が掲げられている。